

原 著

## 日本語では「強い結果構文」は認められないか

川 崎 修 一

### Japanese “Strong Resultatives” Revisited

Shu-ichi KAWASAKI

#### 抄 録

結果構文に関する類型論的研究において、日本語では「強い結果構文」は認められないという主張がなされている。強い結果構文とは、結果状態が動詞の意味に含意されない結果構文のことを指し(\*龍一は魯山人の湯呑みをピカピカに擦った)、結果状態が動詞の意味に含意される「弱い結果構文」と対比される(晴臣はビールをカチカチに凍らせた)。本稿では、このような類型論的一般化について、大規模コーパスからの実例だけでなく、内省による作例に照らしてその妥当性を検証する。そして、この一般化では捉えられない言語事実の存在を指摘した上で、新たに意味的・認知的観点から次の仮説を提案する：日本語においては、状態変化を含意しない動詞であっても、次のような場合に「強い結果構文」として容認される：a. 意味的制約：系列的に情報量の多い(paradigmatically informative)動詞の場合、b. 認知的制約：系列的に情報量が多くない動詞であっても、事象全体のスクリプト(script)から因果関係が想起しやすいと判断される場合。

#### Abstract

This article discusses the deep-seated typological generalization: "Strong resultatives" are NOT acceptable in Japanese. Strong resultatives are those resultatives where the meaning of the verb and the meaning of the resultant state expressed in the resultative phrase are "completely independent of each other" (Washio, 1997, p. 7.): \**kanozō-wa musuko-o azadarake-ni ket-ta* (= *She kicked her son black and blue.*). They are strikingly contrasted with "weak resultatives" in which it is possible to predict from the semantics of the verb what kind of state the object comes to be as a result of the action named by the verb: *kare-wa teeburu-o kirei-ni hui-ta* (= *He wiped the table clean.*) However, this generalization seems to be untenable with a number of actual corpus data and the examples introspectively constructed: *bokoboko-ni nagut-ta*, *hirata-ku/taira-ni tatai-ta*, *tata-ku*, *ketta*, etc. The verbs used in these examples are manner of action verbs and do not imply resultant states, and in this sense they are the cases of strong resultatives. In this preliminary study, I will re-consider the validity of the typological principle and argue that it should be modified, and then propose a following

受理：2011年12月5日

testable hypothesis from a semantic/cognitive perspective: Strong resultatives are acceptably used to the extent that [1] the verbs used are “paradigmatically informative” or [2] the causal relation can be readily inferred from an encyclopedic “script” of the event expressed.

キーワード：強い結果構文，意味的制約，系列的情報量，認知的制約，スクリプト

## 1. はじめに

Washio (1997) に代表される結果構文の類型論的研究において，(1) は有力な一般化とされている。

(1) 日本語においては「強い結果構文」は認められない

強い結果構文とは，(2) に挙げるように，一般に「結果状態が，動詞の意味に含意されない結果構文」と定義されており，結果状態が動詞の意味に含意される(3) の「弱い結果構文」と対比される(本文中で使用される例文は，特に断りのない場合は全て筆者による作例である。また，各例文の\*は「容認されない例」を表す印である)。

- (2) a. \*龍一は魯山人の湯呑みをピカピカに擦った。  
b. \*晴臣お気に入りのチェロをボロボロに弾いた。  
c. \*颯子はヴィトンのバッグを傷だらけに使った。  
d. \*幸宏はブタの貯金箱を粉々に押さえた。

- (3) a. 龍一は部屋の壁をオレンジに塗った。  
b. 晴臣はビールをカチカチに凍らせた。  
c. 颯子はヴィトンのバッグをピカピカに磨いた。  
d. 幸宏はブタの貯金箱を粉々に壊した。

(2) で使われている動詞は，「行動の様態」を表し，必ずしも「状態変化」を含意しない動詞と言われている。実際，何かを「擦る」，「弾く」，「使う」，「押さえる」ことで，何らかの状態変化が発生することは含意されない。一方，(3) の動詞「塗る」，「凍らせる」，は，行為の結果何らかの状態変化が生じることが含意される。例えば，「塗る」という行為には，必ず何らかの色が付着するという結果が，また「凍らせる」行為には，必ず凍った結果が付随している。この言語事実を基に，日本語では「強い結果構文」は容認されないという一般化が通説となっている(例外的に，類像性(iconicity)の観点から日本語の強い結果構文の可能性を示唆した研究として，轟(2004)が挙げられる。同研究で提案されている仮説の妥当性については，稿を改めて議論する)。

興味深いことに，この一般化は日本語だけでなくイタリア語(4a)やフランス語(4b)を含むロマンス系言語にも当てはまる。

- (4) a. \*Corre le sue scarpe a brandelli. (加賀，2007，p. 177)  
(he) runs his shoes to pieces  
b. \*Elle a pleure ses yeux roungis (rouges). (斉木・鷲尾，2009，p. 45)  
she has cried her eyes red

これに対し、(5)に挙げる言語事実が示すように、英語(5a)やドイツ語(5b)に代表されるゲルマン系言語では、「弱い結果構文」だけでなく、結果状態が動詞の意味に含意されない「強い結果構文」も容認されることが確認されている。

- (5) a. The joggers run their shoes into pieces. (加賀, 2007, p. 177)  
b. Die Jogger laufen ihren Schuhe in Fetzen.  
the joggers ran their shoes in pieces

本稿では、このような類型論的一般化について、特に日本語における「強い結果構文」について考察し、大規模コーパス等を用いて(1)の一般化を実証的に検証する。さらに、意味的・認知的観点から、この類型論的一般化を修正した新たな分析の可能性を示唆する。

## II. 日本語における「強い結果構文」の可能性：一般化への反証

上に挙げた(2),(3)の例が示すように、日本語では「弱い結果構文」のみ可能であり、「強い結果構文」は認められないことを確認した。しかし、コーパスデータを考察すると、(1)の一般化には、特に次の2点について再考の余地があるように思われる。

- (6) a. 動詞が結果状態を含意するかどうかの判断基準  
b. 結果状態を含意しない動詞でも成立する、日本語における「強い結果構文」の可能性

まず第一に、動詞が結果状態(状態変化)を語彙的に含意するかどうかという(6a)の問題について、日本語の「磨く」及び、これに対応すると考えられる英語の‘polish’を取り上げて考えてみよう。影山(2001)等では、これらは状態変化を含意する動詞(つまり「強い結果構文」として使われる動詞)として扱われている。したがってこれらの動詞が使われている結果構文は「弱い結果構文」と分類される。

- (6) a. She *polished* the mirror clean.  
b. 彼女は鏡をピカピカに磨いた

特に英語の‘polish’が、状態変化を含意する動詞である根拠として、(7)の言語事実が挙げられる。

- (7) \*She *polished* the mirror, but it didn't become clean at all.

これが容認されない英語であるという事実は、‘polish’が状態変化を含意する動詞であることの証左である。これに対応する日本語は、「磨いたが、全くきれいにならなかった」が考えられるが、仮に「AしたがBにならなかった」というスキーマを、動詞が状態変化を含意するかどうかの判断基準とするならば、日本語の「磨く」はどうかであろうか。

- (8) 龍一は魯山人の湯のみを必死に磨いたが、汚れは全く落ちなかった。

上記日本語については、(少なくとも筆者の調査では)自然な日本語であるというものが一般的な

意見のようである。仮にこれが自然な日本語として容認されるのであれば、「磨く」という動詞は必ずしも状態変化を含意しないということになり、(6b)を「弱い結果構文」に分類することが苦しくなる。

次に、(6b)で2つ目の問題点として挙げた、状態変化を含意しない動詞を用いた「強い結果構文」の可能性について考察する(?は、インフォーマントの数人が、若干の違和感があるが容認されると判断したもの)。

- (9) a. 口論の途中で、龍一は晴臣をボコボコに殴った。  
 b. 幸宏は勝利の瞬間、ボールを高く蹴った。  
 c. ?顕子は部屋の空気を入れ替えるために、引き戸を全開に引いた。  
 d. ?あ〜ちゃんは、ダンスをミスったかしゆかの心をズタズタに罵った。

上掲(8)の「磨く」が状態変化を含意するかは微妙な問題であったが、(9)に挙げる動詞は、状態変化を必ずしも含意しない、いわば「強い動詞」である(実際、影山(2001)では、「蹴る(kick)」、「引く(pull)」、「叩く(pound)」を行為や活動を表わす動詞に分類し、英語の場合のみ結果構文と共起できるとしている)。これを、先の「AしたがBにならなかった」スキーマで検証すると、これがさらに明確になる。

- (10) a. 口論の途中で龍一は晴臣の腹を2, 3発殴ったが、晴臣はビクともしなかった。  
 b. 幸宏はパーティーに招待されなかったことに腹を立て、悔しさのあまり、樹齢2000年の桜の木を思いっきり蹴った。しかし、その桜の木は、彼の心をあざ笑うかのようにビクリともしなかった。  
 c. 顕子は引き戸を必死に引いたが、彼女の力ではまったく全く歯が立たなかった。  
 d. 練習不足が祟ったせいか、かしゆかはコンサートでダンスをミスってしまった。ステージの後、あ〜ちゃんはかしゆかを罵った。しかし、かしゆかは「だってしょうがないじゃん」と全く気にも留めない様子だった。

また、結果状態を語彙的に含意せず、結果構文と共起しない典型的な動詞であると一般的に主張されてきた「叩く」が、結果構文として使われている(11)のような例も数多く見られる(Google検索による実例の一部)。

- (11) a. 平たく叩いた土の両側に、たたら板とよばれる木の板を置いて高さを調節。  
 (<http://japancraft.jp/diary/show/25>)  
 b. 現地ではカジキは“肉”的な扱いで調理をされることも多いようです。一例としては肉たたきで平たく叩いたカジキにチーズや松の実、ケッパーなどを巻き込んでソテーする“インボルティーニ”という料理。(<http://barsf.blog96.fc2.com/blog-entry-122.html>)  
 c. 世界遺産ウィーンの市街地で食べたウィンナーシュニッツェル(平たく叩いた肉のカツレット)は、昨日の立ったまま出てきたマス1匹に続き、美味しく連続の完食と成りました。(<http://4travel.jp/overseas/area/europe/austria/wien/travelogue/10530817/>)  
 d. 半分に割った椰子の実の切断面を木で蓋をして、そこに長さをまちまちに切って、平たく叩いた自転車のスポークを並べて固定する。  
 (<http://www.h5.dion.ne.jp/~sujaku/rensai/music/karinba/karinba.html>)

もし(10),(11)の例を適格な日本語と判断すれば、全て「強い結果構文」に分類でき、日本語では「強い結果構文」は認められないという一般化の反例となりうる。ちなみに、辞書の定義を見ても、これらの動詞が状態変化を含意するかどうかは必ずしも明確ではないことがわかる((12a, e)は明鏡国語辞典,(12b)は大辞泉,(12c)は大辞林より)。

- (12) a. 殴る：相手に攻撃を加えるために、こぶしや棒で乱暴に打つ。
- b. 蹴る：足で勢いよく突く。
- c. 引く：引っ張る。
- d. 罵る：非難してどなる。また、口汚く声をあげて悪口を言う。
- e. 叩く：手や道具を使って、(連続して)打つ。

もちろん、これらの例を規範的に認めないとする立場も少なからず存在することは容易に想像できる。しかし、いずれにしても、上記(10),(11)と同様の反例は他にも多数存在していることも、決して無視できない言語事実である。

そこで次節では、上で見てきたような日本語の強い結果構文の生成において、どのような原理が働いているのかを探求し、(1)の一般化に代わる代案の可能性を、意味的・認知的観点から考察する。

### III. 意味的・認知的代案

前節では、コーパスからの実例や作例に基づいて、「日本語においては、強い結果構文は認められない」という一般化に疑問を投げかけた。本節では、意味的・認知的観点から(13)の仮説を提案し、いくつかの実例や作例によって検証する。

- (13) 日本語においては、状態変化を含意しない動詞であっても、次のような場合に「強い結果構文」として容認されやすい：
  - a. 意味的制約：系列的に情報量の多い(paradigmatically informative)動詞の場合
  - b. 認知的制約：系列的に情報量が多くない動詞であっても、事象全体のスクリプト(script)から因果関係が想起しやすいと判断される場合

ここで重要な2つの概念について説明しておく。まず「系列的に情報量の多い(paradigmatically informative)」とは、類義語間での意味的豊富さのことを指す。例えば、類義語に分類される「罵る」と「非難する」を比較してみよう。「罵る」のほうが、単に「非難する」よりも、系列的に情報量が多く、行為の結果を想起しやすいことは、(14),(15)に挙げる辞書の定義からも明らかである((14a),(15a)は大字泉,(14b),(15b)は大字林より)。

- (14) a. 罵る：ひどい言葉で悪口を言う。声高に非難する
- b. 非難する：人の欠点や過失などを取り上げて責める

- (15) a. 罵る：大声で非難する
- b. 非難する：相手の欠点や過失を取り上げて責める

「罵る」の意味要素として、「非難」が語彙的にコード入れされており、それだけ系列的に情報量が

多いということが出来る。また、波線で示した要素(「ひどい言葉で」、「声高に」、「大声で」)も付加的な情報であり、さらに系列的情報量を豊かにしている。また「スクリプト(script)」とは、経験から抽出された、推論や解釈のもととなる具体的な知識の集まったパターンを指す認知的概念である。例えば、Schank and Abelson(1977)による〈レストラン〉のスクリプトでは、レストランに入る場面、注文する場面、料理を食べる場面、レストランから出る場面の4つのスクリプトがあるとされている。そして個々のスクリプトには、テーブル、メニュー、ナイフ、伝票等の知識の集合体によって形成されている。言語理解にスクリプトが適用されることによって、言語的に明記されていない情報を補うことができ、それだけ理解が容易になると考えられている(Schank and Abelson, 1977等を参照)。次の例を比較してみよう。

- (16) a. 龍一はレストランに入った。シチューを注文した。お金を払って出た。  
b.?龍一はレストランに入った。窓の外を見た。立ち上がって帰った。

両者の情報量に大差はないことは明らかである。しかし、(16a)の理解に困難は生じないが、(16b)の出来事を理解するには困難が伴う。なぜなら(16b)は、我々の持っているレストランのスクリプトに合致しないからである。

これら2つの概念を念頭に、まず(13a)から検証してみよう。この仮説を支持する興味深いデータとして、(17)が挙げられる。(17a)は(9d)で反例として挙げた例の動詞を、「系列的に情報量の少ない(paradigmatically less informative)動詞」に置き換えたものである。すると、とたんに容認度が下がることが観察される。

- (17) a. \*あ〜ちゃんは、ダンスをミスったかしゆかの心をズタズタに非難した。  
b.?あ〜ちゃんは、ダンスをミスったかしゆかの心をズタズタに罵った。(=(9d))

実際には、(17b)を容認できない日本語とする意見も少なくない。しかし、ここでの問題は、各用例の個々の文法性ではなく、(17a)よりも(17b)の容認度が改善しているという「容認度の相対的な差異」である。これは系列的に情報量が多いほど、行為と結果の因果関係が想起しやすくなり、結果構文として容認されやすくなるためと考えられる。更に別の例で検証してみよう。

- (18) a. 口論の途中で、龍一は晴臣をボコボコに殴った。(=(9a))  
b. 口論の途中で、龍一は晴臣をボコボコに殴打した。

適格性の判断においては、(18)の両例は、概ね同等に適格と判断されるか、(18b)の方がより自然に感じるというのがほとんどのインフォーマントの見解である。「殴打する」は「殴る」よりも系列的に情報量の多い動詞である(殴打する: ひどくなぐりつける(大字泉))。容認度の微妙な揺れはあるにせよ、ここで注目したいのは、(18b)が(18a)に比べて容認度が落ちると判断したインフォーマントは皆無であったことである。これは、本稿で提案する意味的・認知的仮説を支持する有力な言語事実と考えられる。

さらにこの仮説を支持すると考えられる言語事実が、高見・久野(2002, pp. 379-380)で指摘されている。次の(19)、(20)の対比に注目してみよう(下線は筆者)。

- (19) a.?太郎は昨日とても忙しくて、一日中、くたくたにかけずり回った。  
b.?最近の若者は、クラブでくたくたに踊りまくるようだ。

(20) \*太郎がくたくたに走った／歩いた／踊った。

高見・久野(2002)によると、(19)の適格性の判断は、話し手の間で揺れるものの、ほとんどの話し手が、(19)は(20)よりも適格性が高いと判断する。そしてその理由を、「かけずり回る」や「踊りまくる」が、「走る」や「踊る」という動詞よりはるかに多くの運動量を意味し、「くたくたになる」ことを含意するためであるとしている。

次に、(13b)を(21)の例に照らして検証してみよう。

- (21) a. 審判が時計を一瞥した。そして日本優勝を宣言するホイッスルが鳴った。感極まった本田は、勝利の瞬間ボールを高く蹴った。  
b. PKを何度も失敗している宮間に、佐々木監督が「ボールをもっと低く蹴りなさい」とアドバイスした。  
c. ?顕子は部屋の空気を入れ替えるために、引き戸を全開に引いた。(= (9c))

これらの用例の動詞は、系列的に情報量の多い動詞ではない(別の言い方をすれば、系列的に情報量の多い類義語が見当たらない)。にもかかわらず、概ね容認される日本語である。もしこの判断が正しければ、これらもまた「強い結果構文」に分類できそうである。これにはどのような理由があるのだろうか。それぞれの文が表している出来事には、どのようなスクリプトが適用できるだろうか。例えば、一般的な〈サッカーの試合〉のスクリプトを考えてみると、キックオフ、試合終了のホイッスル、PK等の知識の集まりが容易に想像できる。したがって、(21a)のように、試合終了と共にボールを蹴り上げるシーンなどは容易に想像できる。また(21b)のように、PKでゴール・ポストの上に外す選手に、低いボールを蹴るように指導する等はよくあるシーンである。さらに、(21c)では、〈空気の入れ替えのスクリプト〉が存在するかどうかは議論が必要であろうが、少なくとも引き戸というものを開けるにはどうすればいいかという知識は一般的に共有されている知識であろう。これにより(13b)を満たしているため、(完全に容認されるかどうかは別にしても)概ね容認されると説明できる。

#### IV. 結 語

本稿では、結果構文の類型論的先行研究によって提案されている(1)の一般化について考察した。そして、同一般化の反証となる例を挙げ、日本語に「強い結果構文」が許される可能性について議論し、新たに(22)の意味的・認知的仮説を提案した((22) = (13))。

- (22) 日本語においては、状態変化を含意しない動詞であっても、次のような場合に「強い結果構文」として容認されやすい：  
a. 意味的制約：系列的に情報量の多い (paradigmatically informative) 動詞の場合  
b. 認知的制約：系列的に情報量が多くない動詞であっても、事象全体のスクリプト (script) から因果関係が想起しやすいと判断される場合

そして、本稿で挙げた実例や作例の適格性が、上記の仮説によって説明できることを検証し、「強い結果構文」は日本語では認められないという一般化には再検討が必要であることを示唆した。ただ、本稿で提案した仮説は、本研究の現段階での暫定的な仮説に過ぎない。また、本仮説の妥当性は検

証不十分であり、今後は大規模コーパスを用いたより包括的な量的検証が不可欠であることは言うまでもない。

## 謝 辞

本研究は、平成22年度日本赤十字看護大学課題研究費の助成を受けて実施しました。本研究を実施するにあたり、ご協力いただきました全ての方々に心より感謝いたします。

## 文 献

- 加賀信広(2007). 結果構文と類型論パラメータ. *結果構文研究の新視点*所収. 177-215. ひつじ書房.
- 影山太郎(2001). *動詞の意味と構文*. 大修館書店.
- 斉木美知世・鷺尾龍一(2009). 言語の類型と結果表現の類型—いくつかの残された問題. *結果構文のタイポロジー*所収. 43-100. ひつじ書房.
- 高見健一・久野暉(2002). *日英語の自動詞構文*. 研究社.
- 轟里香(2004). 英語および日本語における結果構文—Iconicityの観点から. *北陸大学紀要*, 28, pp. 247-255.
- Schank, R.C. and Abelson, R.P. (1977). *Scripts, Plans, Goals and Understanding*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Washio, R. (1997). Resultatives, Compositionality and language Variation. *Journal of East asian Linguistics* 6 (pp. 1-49).